

論文の内容の要旨

論文提出者氏名	吾妻寛之
論文審査担当者	主 査 石塚修 副 査 宮川真一・小泉知展
論文題目	Video-Assisted Thoracic Surgery Thymectomy Versus Sternotomy Thymectomy in Patients With Thymoma. (胸腺腫患者における鏡視下胸腺摘出術と胸骨縦切開胸腺摘出術の比較)
(論文の内容の要旨)	<p>【緒言】胸腺摘出術は胸骨縦切開にて行われてきたが、近年 VATS による胸腺摘出術の有用性が報告されており、日本でも約 30%の症例が VATS で行われるようになった。2013 年に日本胸腺研究会主導で縦隔上皮性腫瘍の全国的な集計が行われ、我々はその大規模データベースを用いて VATS 胸腺摘出術と胸骨縦切開胸腺摘出術を比較し VATS の妥当性を検討した。</p> <p>【対象および方法】日本の 32 施設から集計された 1991 年から 2010 年までに手術が施行された胸腺上皮性腫瘍 2835 例のデータベースより、胸腺腫 2422 例を抽出した。この胸腺腫のうち VATS 症例は 349 例、胸骨縦切開症例は 1917 例だった。VATS の適応外の III、IV 期胸腺腫、非完全切除例、VATS 開始前の 1994 年以前の症例を除外し、術式以外の要因を排除するために propensity score によるマッチングを行った。腫瘍径、正岡病期、組織型、術前後の治療、performance status、悪性腫瘍の既往の有無、重症筋無力症の有無を評価項目として Propensity score を算出し、マッチングさせた VATS 群 140 例、胸骨縦切開 (ST) 群 140 例を対象とした。</p> <p>評価項目を全生存期間、無再発生存期間、再発形式、切除断端の遺残腫瘍の有無、合併症発生率とし、2 群間で比較を行い VATS の非劣勢を検討した。</p> <p>【結果】VATS 群、ST 群のそれぞれの患者背景は、年齢 (ST 群 57.3 才 vs VATS 群 56.9 才)、男性 (59 例 vs 63 例)、重症筋無力症 (51 例 vs 46 例)、平均腫瘍径 (3.9cm vs 3.9cm)、正岡 II 期 (64 例 vs 59 例)、組織型 typeB2,3 (55 例 vs 51 例)、と 2 群間に差を認めなかった。2 群間で差を認めたのは観察期間中央値 (ST 群 5.2 年 vs VATS 群 3.7 年, $p < 0.001$) と拡大胸腺全摘術 (ST 群 88 例 vs VATS 群 56 例, $p < 0.001$) だった。生存率の比較では、5 年全生存率が ST 群 97.1%、VATS 群 97.9%、5 年無再発生存率はそれぞれ 95.0%と 93.9%だった。全生存率と無再発生存率ともに 2 群間に差を認めなかった (全生存率 $p = 0.74$、無再発生存率 $p = 0.91$)。また、胸膜播種などの再発形式も 2 群間で差を認めなかった。合併症発生率は 2 群間で差を認めなかった ($p = 0.25$)。また、創感染や縦隔炎、重症筋無力症のクリーゼなどの主要合併症の発生率にもそれぞれ差を認めなかった。切除断端の陽性率も 2 群間に差を認めなかった。</p> <p>以上より、胸腺摘出術において VATS の胸骨縦切開に対する非劣勢が示された。</p> <p>【考察】VATS 胸腺摘出術について、腫瘍径の大きい腫瘍では術中の腫瘍の損傷や播種が増えるのではないかと、VATS では胸膜を切開するため播種再発が増えるのではないかとする報告が散見される。しかし、本研究では VATS において腫瘍径 > 5 cm の胸腺腫の切除断端の陽性率、播種再発率は増加せず、腫瘍径は VATS の絶対的な適応基準とならないことが示された。また、VATS の胸膜播種発生率は ST 群と同等であり、VATS による胸膜播種増加はないことが示された。</p> <p>本研究の限界として、観察期間が短く予後や再発形式については検討が不十分であることが挙げられた。</p> <p>【結語】本研究では VATS 胸腺摘出術の非劣勢を示すことができた。しかし、胸腺腫は長期予後についてはさらなる追跡調査が必要である。</p>